「芥川」によせる欲望
――神経衰弱から天才への転換へ――

篠崎　美生子

一、症例としての「芥川」

近代日本に限ったことではないかもしれないが、作家はよく、心の病を呈した存在として、分析の対象になる。二〇一四年にも千葉正昭らによる『神経症と文学――自分と言う不自由――』[1]が出版されたが、そこでは漱石から村上春樹などに至る一五名の作家とその代表作が、一種の「症例」として論じられていた。日本文学において、作家自身が「精神」の病や何らかの「心理」的欠落と関連づけて解釈されるようになったのは、だいたい一九三〇年代以降[2]のことであるが、「精神」「心理」等の語を冠せずとも、その方面から作家を語ろうとする書物は、現在に至るまで少なくない。

中でも芥川龍之介は、日本の近代では最も頻繁に心の病の症例として「物語」化された作家だろう。芥川は、満三十五歳の時に薬物によって命を絶ったが、その時に「遺書」のひとつとしてメディアに公開された「或旧友へ送る手記」には、明確な死の理由は語られていなかった。

> 誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或は彼自身に対する心理的興味の不足によるものであらう。僕は君に送る最後の手紙の中に、はつきりこの心理を伝へたいと思つてゐる。（中略）自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の為に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行為するやうに複雑な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安で

ある。[3]

この「唯ぼんやりした不安」という語が、いかに鮮やかにそれまでの芥川のテクストの読み替えを促したかについては、一柳廣孝の説明にまさるものはない。それまで芥川の小説は、完成度の高さと引き換えの作りものらしさが批判されがちだったが、自殺によって晩年の小説はすべて真実と見なされ、「「自殺」という物語の結末に収斂すべく、彼を取り巻くあらゆる構成要素を整理し位置づけようとする試み」[4]がなされるようになった、と一柳は述べる。そうであればこそ、その後の批評、研究から国語教育の場などで語られる「芥川」の「物語」には、非常に高い確率で「病的」「神経」といった言葉が忍び込んでいったのだろう。しかもそれらの語は、一種高尚な「達成」として語られていったのである。

日本近代文学が、弱い「内面」を持つエリート男性の物語を書く／読むメディアとして流通してきたことは、拙著で批判的に論じたことがある[5]。彼らに同情を注ぐ文学のシステムが、エリートの免罪符として機能してしまったと考えられるからである。しかし、「芥川」（芥川の死をめぐる言説）においてのみ、「病的」な「神経」は、まず、どこか輝かしいもののように語られた。それはいったいなぜなのだろうか。

二、「ブッキッシュの死」

没後間もない「第五〇回新潮合評会」は、その好例である。この合評会は、「芥川龍之介氏の追憶座談会」と銘打たれ、徳田秋声、近松秋江、久保田万太郎、久米正雄、小島政二郎に主筆の中村武羅夫が加わって行われたが、長い座談会の中で中心的な話題になったのは、死の理由と、「地震から後に書いたもの」（久保田）、すなわち、一九二三年九月の関東大震災以降に書かれた、芥川にとっての晩年の諸テクストをどう評価すべきかということであった。

もちろん晩年の諸テクストと言っても、いくつかのタイプがある。が、遺稿である「歯車」二章以降、「或阿呆の一生」などがまだ発表されていないこの段階で、最もよく「地震から後」の特徴を表したものとされたのは、「海のほとり」（一九二五）、「年末の一日」（一九二六）、「蜃気楼」（一九二七）など、「心境小説」の形をとったものであった。とくに「海のほとり」と「蜃気楼」には、「閾域下の我」（「海のほとり」）、「意識の閾の外」（「蜃気楼」）など、当時流行し始めたフロイトの精神分析学用語がかすかに織り込まれており、「まだ」「健全ぢやない」ながら、周囲の人々にいたわられて日常世界から逸脱せずにいる「僕」（「蜃気楼」）の特異なありようが際立つ。

これらについて座談会メンバーは、「神経的な象徴主義的な美しさ」（小島）、「芥川さんの実感の背景」（中村）、（「蜃気楼」

は）「変な実感に富んだ――鬼気にも富んでゐるし、深い暗示を含んだ作品」で「あれだけの力がある作品は、芥川の全作を通じて矢張りなかつた」「病的と云へば病的」「神経だけになつて、さういふ風なところだけを実感に出さうとしたもの」（久米）などと評し、主に久米のリードで、芥川の晩年のテクストに「詩」的なもの、「筋のない小説」（小島）が発見されていく。その結果、再び死の理由に話が及び、秋江の以下のコメントが導かれたのである。

> 芥川君の死は、矢張りブッキッシュの死のやうに思ふね。だから高尚は高尚ですね。有島武郎のやうな現実的のイキサツからと云ふよりも、本を読んで故人の厭世思想とか哲学思想とかを交感した結果、本を読んで死んだ人のやうに思はれる。（中略）久米君が云はれる第二の透谷だといつた、厭世的の哲学的の死だといつたのに賛成ですね。

座談会では、芥川の自殺の本当の理由を「家庭生活」や、実母の精神病の遺伝への恐怖に求める意見が出ないわけではなかった。たしかに、それを理由に「神経」を病んで自殺するという因果関係は分かりやすい。

しかし、それでは、レニエ、マインレンデル、クライスト、ラシイヌ、モリエール、ポワロー、エムペドクレスと、紀元前から同時代にわたる西洋の文学者、哲学者等の人名を列挙した衒学趣味的な「或旧友へ送る手記」と、自分の「無意識」を意識して「健全」さを逸脱しかかる「僕」を主人公とした「蜃気楼」などの小説との両立を説明することはできない。そもそも「唯ぼんやりした不安」という語の効果が消えてしまう。そのためにこそ、芥川の死は「ブッキッシュの死」として称えられなければならなかったのだ。

なお、「第二の透谷」というのは、芥川の死を報じた新聞記事に載った久米のコメントに出てくる言葉である。たとえば芥川が社友、社員として所属した時代もある『大阪毎日新聞』（一九二五年七月二五日朝刊）は、「死の直前に書いた『或る旧友に送る手記』菊池、久米、久保田氏等立会の下に昨夜発表さる」として、「手記」の全文を載せ、さらに「第二の北村透谷　遊ぶ気持ちで死んだか　久米正雄氏談」の見出しの下に久米の言葉を掲載している。

久米は第一高等学校時代以来の芥川の「旧友」の一人で、遺族からの電報を受けて、当日いち早く死の床にかけつけた人物である。同じく机の上に置いてあった遺稿「或阿呆の一生」には、「久米正雄君」宛のメッセージが付されており、「僕はこの原稿を発表する可否は勿論、発表する時や機関も君に一任したい」と書かれていた。一方「或旧友へ送る手記」の末尾ちかくには、「どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずに措いていてくれ給へ。僕は或は病死のやうに自殺しないとも限らないのである。」とあったが、久米を中心とした「旧友」らは、

この「遺書」を屏風に貼り出す方法で示し、押しかけたメディアに対応した。いくらかの誤記がありながらも、死の翌日の朝刊各紙にこの「遺書」の全文が掲載されたのは、そのようないきさつによる。

かつて述べたことだが[6]、「或旧友へ送る手記」は、自らの死を、四年前に軽井沢の別荘で、交際中の女性雑誌記者波多野秋子と縊死を遂げた有島武郎の死から差異化しようとするメッセージを発するテクストでもある。「手記」は冒頭で「唯ぼんやりした不安」に言及したのち、のこりの紙幅の大半を、自殺の手段、場所、伴う女性のことに割いている。「縊死」には「美的嫌悪」を感じるために薬品を選び、「別荘の一つもあるブルヂヨア」ではないために「自宅」を実行の場に選び、「一しよに死なう」とする「女人」はいたけれども「スプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた」と「手記」にはある。久米が直近の有島事件を飛び越えて、三〇年以上前も透谷の死を参照しなければならなかった背景には、そうした事情が関連しているだろう。いずれにしても、久米は「或旧友へ送る手記」のナビゲーターとして、非常に重要な役割を果たしたことになる。

「芥川龍之介氏の追憶座談会」でも、芥川の死を有島と差異化してとらえる意見が多数を占め、その結果、芥川の死は「形而上学的」（久米）、「芥川君は死んで完成」（近松）という結論が導かれた。まさに「ブッキッシュな死」であることが認められたわけである。

冒頭にも述べたように、実際にはこのテクストは「唯ぼんやりした不安」という以上に「自殺者自身の心理をありのままに書」くことはできていない。そればかりか、自殺の方法を語ることで「有島」との差異化を試みる点では「形而下」的「手記」でもあるのだが、新旧の西洋の哲学者、文学者――しかも当時の日本であまり有名とは言えない人々の名まで大量に引用したおかげで、衒学的な雰囲気を醸し出し、結果的に、「ブッキッシュ」な「遺書」たり得ることができたと言えるのではないか。あとは、オーディエンスが、「唯ぼんやりした不安」に共感できるかどうかの問題になってくるだろう。それはこの後、人々が「唯ぼんやりした不安」という言葉に満足せず、「不安」の内実を求めて「芥川」像の再構築を繰り返し試みたことからわかる。不思議に思われるのは、この後展開されるさまざまな「芥川」の物語が、例外なく「病的」「神経」といった語を芥川のテクストの中から召喚し、そこにプラスの意味を付与し、感情移入の糸口をみつけようとしていることである。

晩年のテクスト群に「病的」な語をちりばめたのちに「自殺」した作家に、実際に心を病んだ形跡を見出すのは「自然」な解釈だと言えばそれまでだが、一方で今日、「病的」な語を「病的」にするのはオーディエンスの作用だということも明らかである。にもかかわらず、今日なお、「芥川」を語る人々が、やはり「芥川」を一種の「症例」として「物語」化せずにいられないとすれば、それはオーディエンス側の欲望のせいであろう。

以下、「芥川」の物語のいくつかを挙げ、それらがいかに構築されていったのかを検証しながら、それらの「多様性」の背景に、どのような欲望が共有されているかを探ってみたい。

三、宮本と吉本の共通点

芥川の場合、没後わずか二年の一九二九年に岩波版の個人全集[7]が刊行され、書簡も含めたほとんどすべてのテクストを通読できるようになり、その結果、初期から晩年にかけての代表的な小説の解釈をつなぎ合わせて、本格的な「芥川」論を構成する作業が始まった。

この時代の「芥川」論を代表するものは、宮本顕治「敗北の文学」[8]をおいてほかにない。プロレタリア文学者の立場から、「芥川」を「小ブルジョア」の文学を代表するものと見なして批判したこの論は、『改造』の懸賞文芸評論の一等に当選して広汎な読者を得たものだが、興味深いのは宮本が、「この作家の中をかけめぐつた末期の嵐の中に、自分の古傷の呻きを聞く」と述べている点である。つまり、自分が感情移入せずにいられないがためにこそ、「芥川」を批判しなければならないという動機が、この論文の背景にあるわけである。

宮本はまず、芥川を有島と比べ、同じ「社会的範疇」の作家ではあっても、有島の「苦悶」に「殉教者的な稚気」が混じるのに対し、芥川には「より切迫」したものがあると述べる。その上で、「大導寺信輔の半生」を根拠に、「芥川」の生涯は、「中流下層階級」に育ち、「智的才能」だけを「武器」に「芸術の内に入つて行」ったものの、その武器がいかに「狭隘」で「無力」であるかに気づいていくしかなかった生涯だと語るのである。

宮本が評価するのは、芥川が他のブルジョア芸術家より「広汎な社会的関心を持つてゐた」ために、「新興する階級」によって自らが滅ぶ「苦悶」に直面せずにいられなかった点である。その姿に感情移入しつつも、「我々はいかなる時も、芥川氏の文学を批判し切る野蛮な情熱を持たねばならない」と宮本は結論づける。

「芥川」を、プロレタリア文学への敗北の文脈で語るこの論は、断片的な印象の累積である「芥川龍之介氏の追憶座談会」などとは異なり、まとまった作家論足り得ている。しかし、「芥川」の「苦悶」の根拠とされるものは、やはり、座談会でも取り上げられた晩年のテクスト群なのである。

> 「蜃気楼」「点鬼簿」「河童」「彼」等の諸作は、末期に向ふ暮れ方を歩いてゐる氏の様々な呼吸である。（中略）
>
> 「或阿呆の一生」は「言はゞ刃のこぼれて了つた細い剣を杖にしながら」辿つた必死的の記録である。病苦と塵労に疲れ果てながらも、最後には自己をえぐり出して、刃向つて来る運命に叩きつけようとした記録である。「歯車」も暗澹とした作である点において、これに劣らないかも知れ

ない。事実、私は「歯車」に書かれた、狂気の一歩手前にくすぼつてゐる神経に息苦しさに暗然とせずには居られない。何人もかうした人生が「地獄よりも地獄的」であることを疑はないだろう。

根拠に「或阿呆の一生」と「歯車」が加わったものの、強調されるのは、やはり「神経」であり「狂気」である。「芥川」の生涯や死の理由をどのようなものとしてとらえるかにかかわらず、「病的」な「神経」や「狂気」に注目してそこに芥川の「苦悶」の跡を見る論の枠組みは変わらない。

こうしたパターンは、「敗北の文学」と吉本隆明「芥川竜之介の死」[9]との関係においても指摘できる。宮本が「社会的条件」を持ち込んで「芥川」を語ったことを否定する吉本は、やはり、「大導寺信輔の半生」から「中流下層」というキーワードを拾いながら、「小ブルジョア」ではなく「中流下層の庶民」を出発点にした「芥川」像を構築してみせた。

これらの作品をやむをえず隈どっている心理の絵図は、中流下層の庶民作家たる自己の資質をすてて、大インテリゲンチャを気取ろうとした芥川が、知的構成の努力の代償としてうけとらざるをえなかった自己土壌から離れたものの不安な意識を象徴している。

「芥川」がプロレタリア文学に敗北したかどうかという一点を除けば[10]、――もちろん吉本の問題意識にとって、これは大きな違いであるが、「知的構成の努力」が「不安」をもたらしたという吉本の「芥川」と、「唯一の縋り得る生活手段」である「知的才能」が「無力」であったという宮本の「芥川」像の間に大きな懸隔はない。吉本は、宮本が「「歯車」の関係妄想と被害妄想の表現に、ゆきづまったプチ・ブルジョア作家の思想的な苦悶をみ」ているとし、それを「神経的不安と思想的不安をとりちがえた」結果だと批判するのだが、むしろ彼らの「歯車」への注目は、吉本が宮本と同じく「病的」な「神経」や「狂気」に注目し、そのように苦しむ「芥川」に感情移入したいという欲望を共有していたことを示しているだろう。

なお、吉本の「芥川竜之介の死」は宮本「敗北の文学」から三〇年近くたった段階で書かれている。反論としては異例のこの時間差は、転向も含めた文学者の戦争責任を追及しようとする吉本自身の問題意識にだけでなく、プロレタリア文学の壊滅からアジア・太平洋戦争を含むこの空白の期間に、「芥川」の評価が一度揺らいだことにも由来する。換言すれば、一九五八年に発表された吉本のこの論は、戦後の「芥川」再評価を象徴する「芥川論」の典型であったのである。

四、ブッキッシュではない死

こうしてみてくると、追悼座談会、宮本、吉本の「芥川」論において、常に「病的」な「神経」があこがれや感情移入の対象になっていることがわかる。

さきほど述べたように、日本の近代文学においては、弱い「内面」を持つエリート男性の物語は非常に多く、「神経」を病みかけた人の物語も、二葉亭四迷「浮雲」、夏目漱石「それから」、広津和郎「神経病時代」など、いくらも挙げられるが、これらの主人公は、オーディエンスにとって、あこがれの対象とは言い難い悲惨な末路へ導かれる人々である。もちろん芥川も命を絶ったという点では悲惨でないことはないはずなのだが、それでも、「芥川」の死を語る言説において、「病的」な「神経」の価値は反転している。そうでなければ、芥川の跡を追って自殺する読者の発生など説明することができまい。

この反転の原因はどこにあるのか。「芥川」に同一化することが、どのようにオーディエンス自身の価値を高める結果になるのか。それは意外にも、決して「ブッキッシュ」とは言えない自殺の別解によって、見えてくるように思う。

吉本の「芥川竜之介の死」を、先ほど戦後の「芥川」再評価の例と述べたが、ほかに、評論や研究の世界以外で行われた「芥川」再評価として、黒澤明監督の映画「羅生門」を挙げることができる。「藪の中」を主な原作として一九五〇年に公開されたこの映画は、同年のヴェネチア国際映画祭で金獅子賞などを受賞、このことをきっかけとして、生前の芥川を知る人々から、改めて「芥川」の回想が語られることとなった。その中でも最もオーディエンスに衝撃を与えたものは、生前の芥川の親友で、装丁画家でもあった小穴隆一の回想記である。それは、小穴宛に残された「白封筒」の「遺書」を、「某の字一字だけ伏字に」して紹介するものだった。

> 僕等人間は一事件の為に容易に自殺などするものではない。僕は過去の生活の総決算の為に自殺するのである。しかしその中でも大事件だつたのは僕が二十九歳の時に某夫人と罪を犯したことである。僕は罪を犯かしたことに良心の呵責は感じてゐない。唯相手を選ばなかつた為に（某夫人の利己主義や動物的本能は実に甚だしいものである。）僕の生存に不利を生じたことを少からず後悔してゐる。
>
> （中略）
>
> 僕は勿論死にたくない。しかし生きてゐるのも苦痛である。他人は父母妻子もあるのに自殺する阿呆を笑ふかも知れない。が、僕は一人ならば或は自殺しないであらう。僕は養家に人となり、我儘らしい我儘を言つたことはなかつた。（と言ふよりも寧ろ言ひ得なかつたのである）僕はこの養父母に対する「孝行に似たものも」後悔してゐる。しかしこれも僕にとつてはどうすることも出来なかつたので

ある。今、僕が自殺するのも一生に一度の我儘かも知れない。僕もあらゆる青年のやうにいろいろ夢を見たことがあつた。けれども今になつて見ると、畢竟気違の子だつたのであらう。僕は現在は僕自身には勿論、あらゆるものに嫌悪を感じてゐる。

芥川龍之介

小穴はこの「遺書」の引用の後、「「藪の中」は、龍之介みづからがこころの姿を、人ごとのやうに写してゐた作品だ」[11]と述べている。いずれにしても小穴発言は、「或旧友へ送る手記」の有島批判などの効果もあって、表向きには決定的な死の理由としてほとんど語られることのなかった女性問題を、「藪の中」を口実に白日の下に引きずり出したものと言えよう。

これは一見、これまで確認してきた「芥川」の物語とはかなり異質に見える。久米の言葉を借りるならば、これまで紹介した物語はいずれも一応は「形而上学」的であったのに対し、この物語はそうではないからだ。

ところが、吉本は後年「芥川龍之介における虚と実」[12]で芥川を再論し、そこにこの小穴宛遺書も埋め込みながら、芥川の小説において「大正六年から十年ころまで」に生じた「歴史物から現代物への一種の〈乗り継ぎ〉」を説明してみせた。

たしかに芥川は初期から歴史物と現代物とを、ちょうど近松の時代物と世話物のように同時に書き分けてきている。けれどいずれにせよ虚構の意識の崩壊に直面したのは、この〈乗り継ぎ〉の時期であった。何がこの虚構性を崩壊に導いたか。わたしたちは実生活にその要因をつきとめることはできない。強いて関連づければ小穴隆一宛の遺書のなかで「その中でも大事件だつたのは僕が二九歳の時に□夫人と罪を犯したことである」といういい方で象徴されている恋愛関係であったかもしれぬ。だが直接には〈乗り継ぎ〉の折の列車の中身とは意味がちがう。〈乗り継ぎ〉時期の歴史物と現代物に共通する内容を、ひと口にいってみれば異常心理や男女間の不信や疑惑や不安についての強烈な関心であつた。

吉本は「虚構の意識の崩壊」という挫折の文脈で改めて「芥川」をとらえ、そのターニングポイントに「□夫人」との「罪」を置いて見せる。つまり、「芥川龍之介氏追憶座談会」以来すでに指摘された、「地震」の前後における作風の変化という問題を取り込むとともに、「実生活にその要因をつきとめることはできない」と留保しながらも、「□夫人」をきっかけに「虚構性」を維持する余裕が失われ、「異常心理や男女間の不信や疑惑や不安」に満ちた小説が書かれ始めたというのである。

吉本はその例として、「二つの手紙」「開化の殺人」などに言及するとともに、「芥川の行き詰りの感じはこの辺りから開始されている」として、直ちに遺作「或阿呆の一生」を引用して

みせる。

彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず体力も衰へはじめた。何人かの医者は彼の病にそれぞれ二三の診断を下した。――胃酸過多、胃アトニイ、乾性肋膜炎、神経衰弱、脳疲労……

しかしかれは彼自身彼の病原を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、――彼の軽蔑してゐた社会を！

（「或阿呆の一生」四十一　病）

吉本はその上で、「精神が生理的な異変を感受する能力をもつ」以上、芥川のこうした「精神の状態」は「慰めることも救抜することもできない」ものであったと、その孤独な死に思いをはせる。この「芥川龍之介における虚と実」という評論は、上に述べたように、「芥川」について語られた過去の物語を複数取り込みながら、芥川自身を「症例」として語る地点に、実にうまく落としこんだテクストだったと言えよう。

五、神経衰弱から「天才」への転換

以上、没後間もない時期から、誰もが晩年のテクスト群の「病的」な「神経」に注目して「芥川」像をつむいでいった上に、吉本の第二の芥川論によって、それら複数の「芥川」が概ねひとつに統合された可能性を示した。そのようなことが可能であったのは、複数の「芥川」像の背後に、オーディエンスの共通の欲望が潜んでいたから、すなわち、自らもエリート男性であるオーディエンスたちが、自らの「病的」な「神経」の免罪符を「芥川」に求めることができたからである。それこそが、「芥川」への感情移入の正体であり、さらにその背景にあったのは、「芥川」の男性性を守ろうとするミソジニーである。

唐突にミソジニーに言及したが、これまで紹介した「芥川」像は、エリート男性の価値観に沿って語られているという点で、あるいは露骨に女性によって脅かされた「芥川」を語るという点で、やはりそこに関連づけることができる。いや、この後に語られていった「芥川」像にしても、たとえば、「芥川龍之介における虚と実」の直前にまとめられた三好行雄『芥川龍之介論』[13]や、「芥川龍之介の虚と実」への応答とも見なせる「宿命としての母」[14]も、「芥川」を挫折の文脈で語り、その挫折の要因に「狂人であつた」[15]実母あるいは実母に育てられなかったことからくる「母親願望」を挙げている。「狂人の娘」か「狂人であつた」母かという違いは大きいはずだが、この差異も、芥川ら日本の近代作家に好まれたO・ワイニンゲル（Otto Weininger）を介在させれば両立しうる。広く読まれた『男女と天才』[16]によれば、「女性」というものは「母」と「娼婦」の二タイプしかないとされる。それに仮に従うなら、これらふたつの

「芥川論」も、「芥川」にとっての躓きの石は結局女性であったというところで一致してしまうのだ。

そもそも、あらゆる「芥川論」の出発点にあった「或旧友へ送る手記」に、甚だしいミソジニーが通底していたとも言える。この「手記」は、クライストが「自殺する前に度たび彼の友だちに（男の）道づれになることを勧誘した」ことを紹介しながら、「僕は不幸にもかう云ふ友だちを持つてゐない」とし、つまりはあくまで親しい男友達の代役としての「女人」であることをにおわせつつ、一度は「一しよに死なうとした」「女人」がいたことを強調してみせる。語り手「僕」は、こうして異性愛システムにおける自分の価値の高さを確認してから、敢えて「スプリング・ボオドなしに死に得る」自分であると語るのである。「一しよ」に死ぬにしろ死なないにしろ、「僕」にとって「女人」は単なる「スプリング・ボオド」という手段に過ぎないわけだ。

この展開は、吉本「芥川龍之介における虚と実」が、芥川の挫折のきっかけを「□夫人」に求めながらも、「□夫人」と縁を切ることができたあとにこそ、「何故か」芥川の「晩期を覆う病気は顕在化しはじめた」とする運びにも似ている。これらの文脈の下では、女性は、男性を傷つける存在であるとともに、致命傷を与えるほどの強力な存在であってはならないかのようである。

では、この強烈なミソジニーと、「芥川」を「病的」な「神経」、もしくは「狂気」に関連づけて語ろうとする欲望は、どのように結びつくのだろうか。見逃せないのは、男性の狂気を「天才」に結びつけて語ろうとする当時の言説である。いま例示したワイニンゲルのほかに、当時流行していた書物に、犯罪心理学で知られるロンブローゾ（Cesare Lombroso）の『天才論』[17]があった。その序文には、以下のようにある。

> 偉大なる天才が精神病者であつたといふことは今では疑ひのない事実になつてゐる。これから押して考へて見ると天才といふものは度合こそ違がへ皆な多少精神病的素質を有してゐるものであると考へることが出来る。

ロンブローゾはこの前提の上に、天才が「精神病」であった実例を数多く示し、中でもシューマン、ボードレールといった芸術家については、写真も挙げて詳述している。なお、挙げられた例のほとんどは、男性である。

なお「天才」については、先に挙げたワイニンゲルの抄訳『男女と天才』にも言及があった。この書物では、あらゆる人間が男性的要素（M）と女性的要素（W）の組み合わせで説明されているのだが、その説明は、どの個体も異性の要素が五割に達することはないという前提に基づく。その結果、女性は女性的要素（W）＝「性慾」で半分以上が満たされ、男性は、男性的要素（M）＝「性慾以外、戦闘、遊戯、社交、宴遊、議論、科学、事務、政治、宗教及び芸術」で半分以上が満たされるため、「芸

術」の才能を極限まで有した「天才」は、男性にしか現れないというのである。

ワイニンゲルやロンブローゾは単行本でも好んで読まれたが、こうした価値観に基づく言説には、もっと手軽に、中村古狭主幹の雑誌『変態性欲』[18]（一九一七―二六、全百三冊）などで触れることができた。当時、東京帝国大学の心理学は、「透視実験」[19]に加担した失敗から、精神病を器質的な脳の病と見なして治療する「精神病学」へとかじを切った。そのため『変態心理』は、そこからあぶれたフロイト「精神分析学」の言説や、性（慾）、犯罪、狂気等々、「常態」でない雑多な言葉が同居する空間となっていたのである。誌面からは、ワイニンゲルやロンブローゾが発した「科学的」な装いを持った西洋由来の言説が、ときには誰の説かもあきらかにされないまま、「最近の学説」などのコラムに掲載されているのを確認することができる。

ワイニンゲル、ロンブローゾ、そしてそれらを肥やしにできたもっといかがわしい『変態心理』の空間にただよう言説を背景にすれば、芥川の「病的」な「神経」なり、「狂気」（の遺伝のおそれ）などは、少しも「芥川」を傷つけることにはならない。むしろ「芥川」の「天才」を証明する要素として、「芥川」の物語に欠かせないものとなるだろう。換言すれば、いまなお「芥川」の「病的」な「神経」に「天才」の証拠を見、そこに感情移入することで優越感をはぐくむ一部のオーディエンスの存在は、その人がいまだに二〇世紀初頭のパラダイムから逃れられていないことの証左になるということだ。そこから逃れるには、たとえば、一九三〇年代半ばから一九五〇年代初めにかけて、一度失墜した「芥川」評価が、なぜ、時間の空白を埋めて取り戻されたのか、そのときになぜ、過去の言説の検証がなされなかったのかが問い直されねばならないだろう。

そして、ミソジニーから距離をとった「芥川論」が今後書かれるとすれば、その前に、芥川自身もその影響下にあったとされる、ワイニンゲル、ロンブローゾ、クラフト＝エヴィング、フロイト等の言説をいったん問い直すことから始めねばなるまい。でなければ、作家が学んで書いた「症例」を、作家自身の「症例」として語り、再生産する失敗にすら陥りかねないだろう。

六、「狂人の娘」

しかし、まずは手っ取り早く、「狂人の娘」という語の力が、これまでの「芥川」の磁場を解体するかもしれないことに、一言ふれておきたい。

> それは木の芽の中にある或ホテルの露台だつた。彼はそこに画を描きながら、一人の少年を遊ばせてゐた。七年前に絶縁した狂人の娘の一人息子を。（中略）
>
> 「あの子はあなたに似てゐやしない？」
>
> 「似てゐません。第一……」

「だつて胎教を云ふこともあるでせう」
彼は黙つて目を反らした。が、彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、残虐な欲望さへない訳ではなかつた。
（「或阿呆の一生」三十八　復讐）

僕はひとりこの汽車に乗り、両側に白い布を垂らした寝台の間を歩いて行つた。すると或寝台の上にミイラに近い裸体の女が一人こちらを向いて横になつてゐた。それは又僕の復讐の神、――或狂人の娘に違ひなかつた。……
（「歯車」三　夜）

このように「彼」を脅かしたという女性が「狂人の娘」という名で呼ばれねばならなかった理由について、これまで研究史ではほとんど扱われてこなかった[20]。日本の近代においては、女性の「狂人」は、しばしば「狐憑き」と呼ばれて調伏や私宅監禁の対象となったという。そうした例は『変態心理』に限りなくみられるところであるし、芥川の母が婚家の新原家の二階に留め置かれたのもよい例である。あるいは小説などにおいても、鷗外「舞姫」のエリスのように、「狂人」となった女性は言葉を失い、ただ他者の「手記」の中で一方的に表象されるのが通常であった。ところがこの「狂人の娘」は、過去の愛人に、自分の「一人息子」の父である可能性をにおわせて、戦慄させる力を持っているのである。

では、そういう女性をあえて「狂人の娘」と呼ぶところには、いったいどのような効果が生じるだろうか。まず「狂人の娘」を「狂人」（であるの父）の「娘」と仮定した場合、この女性の個人としての主体性は薄められ、言葉の威力も弱まるだろう。「或狂人の娘」とも呼ばれるこの人物、「或阿呆」「或旧友」「或画家」など、芥川のテクストにおいて「或」が冠されるほかの人物はみな男性である。その連想を介すれば、「狂人の娘」は「狂人」である父の娘となり、「或阿呆の一生」〔三十八　復讐〕のエピソードはむしろ「狂気」を帯びた男同士の対決の様相をも帯びてきてしまうだろう。

しかし、「狂人の娘」は「狂人」である「娘」とも読める。このように解釈した場合、彼女の言葉からは、主体性よりも信憑性が失われるが、その代わりに、「狂人の娘の一人息子」の位置は、「狂人だつた」母を持つ「彼」（「或阿呆の一生」）に限りなく近づいていくだろう。「彼」は、絶縁した愛人を「狂人の娘」と呼んでその言葉を抑圧することによって、結果的に彼女の「一人息子」から目を反らすことが一層困難になってしまうはずである。たとえその「一人息子」と「彼」との間に血縁関係がなくとも、二人は「狂人」の母を持ち、その「気違ひの息子」[21]であることの絶望や恐怖におびえて暮らさなければならない同類なのだから。

芥川のテクストが、「或旧友へ送る手記」に限らず、しばしばミソジニーを帯びていることは、かつて論じたとおりであ

る[22]。たとえば「羅生門」「藪の中」「秋」「舞踏会」などに登場する発語する女性は、小説の時間内において罰されるように作られている。では、晩年の複数テクストにまたがって登場する「狂人の娘」はどうか。この人物も、「狂人の娘」と呼ばれるという罰を受けているとは言えようが、その名づけ方によって、「彼」（「歯車」では「僕」）こそがかえって不利な立場に立たされているとも言える。「歯車」では「狂人の娘」は、「復讐の神」とも呼ばれているが、むしろその女性を「復讐の神」にしたのは、「復讐」と処罰のために彼女に「狂人の娘」という名を与えた「彼」（「僕」）自身であったという解釈も浮上してきてしまうだろう。

中田睦美は、「或狂人の娘」のモデルとされた秀しげ子の足跡を調査し、「〈秀しげ子〉その人と芥川文学およびその周辺の文学者たちの描いた人間像との間」の「ズレ」を指摘しつつ、「芥川の残した《動物的本能》というイメージをそのままうけついだ」「言説に最も驚いたのは、秀しげ子自身だったのではあるまいか」[23]と推測している。

「或旧友へ送る手記」に、自らの死を有島の死と差異化するしかけがあったことは繰り返し述べたが、「狂人の娘」もまた、芥川による「芥川論」とも言うべき晩年のテクスト群のなかに戦略的に召喚され、オーディエンスの欲望がそれを長期にわたって支えてきたのだとも考えられるのではないか。「芥川」においてそうしたしかけを解く余地は、没後九〇年を越える現在も、まだ残っていそうである。

註

1　大本泉・後藤康二・二木文明・北條博史・千葉正昭編『神経症と文学――自分という不自由――』（鼎書房、二〇一四）。

2　中村古峡「精神分析学と現代文学」（『岩波講座世界文学』第一一回配本、一九三三年一一月）で西洋での研究例が一部紹介されているほか、フロイト「精神分析」との関連を前面に出した日本近代文学の研究書として、北山隆『漱石の精神分析』（岡倉書房、一九三八）や大槻憲二・宮田戊子『近代日本文学の分析』（霞ヶ関書房、一九四一）などがある。

3　「或旧友へ送る手記」（『東京日日新聞』一九二七年七月二五日ほか各紙、『文藝春秋』一九二七年九月号ほか各誌に掲載。）

4　一柳廣孝『無意識という物語――近代日本と「心」の行方――』（名古屋大学出版会、二〇一四）一二六頁。

5　拙著『弱い「内面」の陥穽　芥川龍之介から見た日本近代文学』（翰林書房、二〇一七年）九―一六頁。

6　註5に同じ。二二六―二二九頁。

7　『芥川龍之介全集』全七巻別冊一（岩波書店、一九二七―一九二九）。元版全集。

8　宮本顕治「敗北の文学」（『改造』第一一巻第八号、一九二九年八月）。

9　吉本隆明「芥川竜之介の死」（『国文学解釈と鑑賞』一九五八年八月、のち『芸術的抵抗と挫折』未来社、一九五九）。

10 「芥川竜之介の死」も収められた『芸術的抵抗と挫折』（未来社、一九五九）等で、吉本は「転向」をつよく批判しており、その文脈においては、プロレタリア文学に芥川が敗北したかどうかという一点が極めて重要であったとは考えられる。

11 小穴隆一「「藪の中」について」（『芸術新潮』一九五〇年一一月、のち『白いたんぽぽ』日本出版共同、一九五四年）。小穴は一九三〇年代から、芥川の死に「S女史」が関係することを書いてきたが、実際の遺書が公開されたのはこの段階になる。

12 吉本隆明「芥川龍之介における虚と実」（『国文学　解釈と教材の研究』一九七七年五月、のち『悲劇の解読』筑摩書房、一九七九）。

13 三好行雄『芥川龍之介論』（筑摩書房、一九七六）。

14 三好行雄「芥川龍之介・人と文学」（『芥川龍之介必携』学燈社、一九七九年、のち『鷗外と漱石　明治のエートス』力富書房、一九八三に「宿命としての母」として再録）。

15 芥川龍之介「点鬼簿」（一九二六）の冒頭には、「僕の母は狂人だった」とある。「狂人だった」実母については、「或阿呆の一生」などにも言及がある。

16 片山正雄訳・編『男女ト天才』（大日本図書、一九〇六）、原著は『性と性格』*Geschlecht und Charakter*, 1903.

17 ロンブロゾオ作、辻潤訳『天才論』（三星堂出版部、一九一六、篠崎所蔵の『天才論』は一九一九、訂正九版）、原著は *L'uomo di Genio*, 1888.

18 『変態心理』の言説空間については、竹内瑞穂『「変態」という文化　近代日本の〈小さな革命〉』（ひつじ書房、二〇一四年）が詳しい。

19 透視能力を持つとされた女性（三船千鶴子、長尾郁子）に東京帝国大学講師の福来友吉が注目、一九一〇年以降、公開実験によって科学的にその能力を実証しようとしたが、実験に細工が見つかるなどしてスキャンダルとなり、マスメディアの批判の的となった。

20 佐高美穂「「僕」の同質性と男の〈狂気〉――芥川龍之介『歯車』論――」（『名古屋大学国語国文学』八三号、一九九八、一二）が、「狂気の原因を女性に付与し、狂気を外部からの脅威として語った結果、反射的に、本来的には狂気から無垢な（はずの）「僕」を作り出し、そうであるにも拘わらず、現に狂気に陥りつつあるという現状認識を生み出す。だが、狂気の根源を女性化したところで、彼自身は救われない。」としている点が、虚構としての「狂人の娘」を考える際にも参考になる。

21 芥川龍之介「歯車」〔四　まだ？〕で、「僕」は「朱舜水」や「「不眠症」のシヤウの発音を正確に出来ないのを感じ」「気違ひの息子には当り前だ」と心に呟く。

22 注5に同じ。四三―四九頁。

23 中田睦美「〈秀しげ子〉のためにI――芥川龍之介との邂逅以前――」（『論及日本文学』六五、一九九六、一二）。